



# やまゆり

学校だより

令和6年3月1日  
91号  
学校長 杉本賢二

校訓 「和の心」  
学校教育目標 「社会に貢献しながら自立する生徒の育成」 一気づき・考え・実行するー  
校内研究重点 「個別最適な学びと協働的な学びで、主体的に学習する生徒を育成する」

学校教育目標 「生徒の心身の安全を守るための地域連携」

## 深澤巡査部長さんに「防犯講話」をして頂きました

昨日、2月29日(木)に多目的スペースで道志村駐在所の「深澤健己」巡査部長さんから全校生徒を対象に「防犯講話」をして頂きました。

講話の内容は、①SNS、②迷惑動画投稿、③消費者トラブル、④違法薬物等についてです。本校の生徒のスマートフォンの所持率は高い状況です。しかし、便利さの陰に、講話して頂いた4点の迷惑行為や犯罪等の問題があり、道志中の生徒の心身の安全を守るための知識や技能を高めるために防犯講話を開催しました。

消費者トラブルにおいては、深澤巡査部長さんの体験を交え、冷静さが保てないような心理状況では、効用の低い物品を購入してしまう可能性があることを話して下さいました。

生徒たちは、深澤巡査部長さんの話を自分のこととして捉え、真剣に聞いていました。

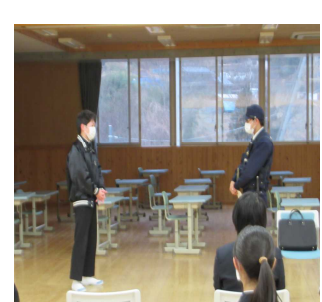
自分の体験も紹介しながら、親身になって生徒の安全を考え指導して下さいました深澤巡査部長



心と姿勢を正し、集中して話を聞いていた生徒たち



雅也さんのお礼のことば



学校教育重点目標 「豊かな心の育成」

## 技術科の芦澤辰文先生とのお別れ

本日、技術科の芦澤先生の最後の授業があり、生徒からお別れの挨拶をしました。本校は小規模校のために、技術科や美術科(山室先生)を小規模非常勤講師として県に申請し、お二人の先生方が本校での指導を承諾して下さっていることによって専門の先生の指導を受けることが出来ています。

前任校の都留市の中学校では、指導して下さる先生が見つからないために、自校の教職員から「無免許申請」を県教委に承認して頂き、社会科や理科・英語科の先生方が分担して技術科や美術科を指導していました。

教職員の働き方改革が叫ばれ、自分の教科準備にも時間の余裕がない中で、大変な苦勞を強いられながら技術科や美術科等を指導しているのが現状です。

芦澤先生、山室先生方のご理解と献身的なご努力によって、本校の実技教科指導が成り立っていることをご承知下さい。

長く本校の指導をして下さっている芦澤先生 1年生の技術科で感謝の言葉を述べる様子



3年生のお別れ 委員長の雅也さんが3年間の指導への感謝と高校での努力を伝えました



学校教育重点目標 「確かな学力の育成」・「豊かな心の育成」

## 3月1日は「ビキニデー」 歴史を学ぶことは未来を見つめること

道志中では、2年生の校外学習で東京都の夢の島にある「第五福竜丸」の体験学習をしていました。それは、3年生の広島への修学旅行に繋げ、「人権や平和について」学ぶ事を大切にしていたからです。

しかし、現在は横浜市との交流学習の提案があり、現在の「野島青少年センター」に宿泊しながら学ぶ体験学習に変化しています。

**3月1日は、「ビキニ・デー」と呼ばれています。**ビキニとは、南太平洋のマーシャル群島の中にある珊瑚礁の島のビキニ環礁のことです。

放射能の被害は、ヒロシマの原爆・長崎の原爆・第五福竜丸・東日本大震災の東京電力福島第一原発と日本では4回受けています。放射能の被害を4回受けているのは、世界でも日本人だけです。まず、「第五福竜丸」について学びましょう。

マグロを追って、太平洋上のビキニ島沖を第五福竜丸が進んでいた時、夜明け前の南西の空に、すさまじい光が表れました。

「もう夜が明けたのか」「おかしいな、陽が西からのぼるなんて・・・」と思っているうちに、大きな音が海面に響いてきました。その後、辺りは薄暗くなり、白い粉が降り始めました。数時間も経つと、甲板は真っ白になってしまいました。

「これはおかしい！」と第五福竜丸は、漁をやめ、急いで焼津港に向かいました。1954年3月1日、アメリカはビキニ環礁で水素爆弾の実験を密かに行いました。

その水爆実験は、15メガトンの原爆です。1945年の広島型の原爆の1000倍の威力がありました。その実験で、1,8キロの周囲、深さ60メートルの穴ができたといわれています。過去最大の核実験は、1960年代にソビエトの行った50メガトンの実験で、広島型の3300倍の威力がありました。

第五福竜丸は、アメリカの指定した危険区域の外、ビキニ島沖160キロでマグロ漁をしていました。そこへ、死の灰(放射能を多量に含んだ灰)が降り注いだのです。焼津に帰った乗組員達は、さっそく病院で手当を受けました。診断の結果はなんと全員放射能によって体が冒されはじめていました。そのうちの一人である無線長の「久保山愛吉」さんの闘病生活は多くの人の注目を集めました。その年の9月23日には亡くなってしまいました。被爆から270日目の事でした。

当時アメリカはこの水爆実験での死者はいないと主張し、日本も被害者に対して保証してくれませんでした。

「南海の強い放射能！」と新聞報道されると、魚屋・すし屋には客が寄りつかず、「生水を飲むな」「雨にあたるな」と叫ばれるようになりました。「風評被害」で仕事にも大きな影響が出ました。そんな時、人々の不安は、「原水爆は禁止しろ！」という怒りとなって燃え広がっていきました。

## 第五福竜丸を保存しよう！

第五福竜丸は、その後改造されて東京水産大学の練習船として使われました。ところが、1967年の2月下旬のことです。一隻の老朽船が東京港に入港してきました。その名は、はやぶさ丸。廃船処分を間近にして、館山からやってきた船を「第五福竜丸」だと見抜いたのは、都の港湾局で働く労働者でした。

その人達の間では、「明日は3月1日。原水爆の被害を3度も受けたのは日本人だけだ。平和を守る活動が特に、今、大切なんだ・・・」と訴えたそうです。

第五福竜丸は、夢の島近くに係留され処分・解体の日を待つ運命に立たされていました。

その頃、「第五福竜丸を保存しよう」という声が上がりました。

### 船を支えた人々

「わしみたいな学問の無い者には、難しいことは分からないが、とにかくこの船は沈めてはいかんと思った。・・・」と語る島田さん。船を守る中心的な活動をした人です。

保存運動を進めていた人たちは、徹夜で船を見張りました。台風の後船は傾き、傷みがひどくなって連日、タイヤ・ロープを集めて修理しなくてはなりません。「ゴミの中にボロボロの船が傾いている。しかも、さびだらけ・・・」これが島田さんが始めて船を見たときの印象だそうです。

1972年のこと、船のペンキ塗りを頼まれていた島田さんは船から水を抜く仕事も任されました。夏はむっとする悪臭と熱風。2年半もの歳月が必要だったそうです。中学校の教諭であった大塚先生という方もその様子をパンフレットにして発行し続けたそうです。

こういう努力の成果で、第五福竜丸は1976年に完成した東京都の夢の島の展示館に収められたのです。その展示館の庭には、「原水爆の被害者は、私を最後にして欲しい」という久保山さんの最期の言葉を刻んだ碑が建てられています。

### 体験学習をした道志中の先輩のことば

- 私は今まで第五福竜丸の事は知りませんでした。広島・長崎の原爆よりこの水爆実験の方が威力が強かった。死亡者の数ではなく、差別や偏見で辛い思いをしたことは事実なので原爆の事をもっとみんなで理解する必要があります。
- 戦争が無くなり、世界が平和になれば悲しい思いをする人がいなくなると思う。何も悪い事をしていない人が、被爆して亡くなり、現在も病気で苦しんでいることを見逃してはならないと思う。平和への意識や身近な平和を創る努力を一人一人がもつことが大切だと思う。

